

つながる

Tsu-na-ga-ru

7 月号 2021 July No.06



SPECIAL REPORT

中日新聞「リンクト」
LINKED
plus+
病院を
知ろう

生き方に寄り添う
がん診療のカタチ。
がんセンター特集

CONTENTS

- 1 治療を学ぼう
- 2 チーム医療を知ろう
- 3 HOSPITAL NEWS

院長メッセージ

当院は2年前から、愛知県がんセンター愛知病院のがん診療の機能を順次集約させ、「がんセンター」としてがん医療の統合を図ってきました。そして、令和3年4月、待望の緩和ケア病棟が開設され、いよいよがんセンターが本格的に始動しました。今号は、その取り組みに焦点を当て、当院がどんながん診療をめざしているのかをご紹介します。

治療を学ぼう

今回のテーマ

がんゲノム医療

がんゲノム医療とは？

一人ひとり異なるがんの遺伝子の変異を調べ、治療の最適化や予防予測を行います。

■ がんゲノム医療の目的は ■ 予防と治療の二つがあります。

がんは遺伝子の変異による病気です。そこで、遺伝子変異に基づいて診断・治療する「がんゲノム医療」の取り組みが進んでいます。ゲノムは、遺伝子+染色体の造語で、DNAすべての遺伝情報を指します。

がんゲノム医療は大きく分けて、二つあります。一つは、がんの遺伝が心配な方を対象に、遺伝カウンセリングや遺伝学的検査を行う「個別化予防」。二つ目は、がんの薬物療法が必要な方を対象に、遺伝子の変異を調べ、最適な治療薬を選定する「個別化治療」です。これまでがんの治療薬は、肺、大腸など臓器によって決められていました。しかし、がんゲノム医療によって、共通の遺伝子の変異があれば、違う臓器の治療薬でも効果が期待できることがわかり、治療薬の選択肢が広がります。



■ 「がん遺伝子パネル検査」で ■ 一度に多数の遺伝子を調べます。

がんの遺伝子変異を調べるために、令和元年6月より、「がん遺伝子パネル検査」が保険適用になりました。これは、次世代シーケンサーという装置を使い、100種類以上のがん遺伝子の変異を1回の検査で調べるものです。従来は1回の検査で1遺伝子しか調べられなかったため、これは非常に大きな進歩だといえます。

但し、この検査は標準治療を終えた患者さんが対象で、固形がんであることなど、いくつかの条件を満たす必要があります。また、検査しても、有効な薬剤が見つからないこともあり、検査から治療開始まで時間がかかるという難点もあります。今後、こうした課題を一つひとつ克服しながら、患者さん一人ひとりに合わせたオーダーメイド治療を発展させていくことが期待されています。



Doctor's message



がんセンター長・
乳腺外科統括部長
村田 透

「がんゲノム医療連携病院」として 個別化予防と個別化治療を推進します。

今、日本全国で、がんゲノム医療の体制づくりが進められています。がんゲノム医療中核拠点病院(12カ所)を中心に、がんゲノム医療拠点病院(33カ所)、がんゲノム医療連携病院(180カ所)が整備されています。

当院は令和2年4月、がんゲノム医療連携病院に指定され、遺伝カウンセリングの提供やがん遺伝子パネル検査による医療の提

供に取り組んでいます。しかし実際のところ、上でも述べているように、検査しても有効な治療薬が見つかるケースは十数%にすぎません。今後、治療薬の進歩とともに、さらに個別化治療を推進できるよう、臨床実績を積み重ねていきたいと思ひます。


 プラス
 a

▶ 夏バテ予防①

夏バテ予防は、運動、睡眠、栄養のバランスが大切。生活習慣を整え暑さに負けない体づくりを!



SPECIAL REPORT

生き方に寄り添う がん診療のカタチ。

がんセンター特集

高度ながん医療と手厚い支援体制で
患者の人生を支えていく。

CHAPTER 01 がんセンターが いよいよ本格稼働。

岡崎市民病院は、これまでがん医療に積極的に取り組んできた。手術では、精緻な手技を可能にする手術支援ロボット(ダヴィンチ)を導入。カメラを用いて小さな創で治療が可能な腹腔鏡下手術とともに、患者の体に優しい低侵襲手術の実績を重ねてきた。放射線治療では最新医療機器をそろえ、高精度放射線治療を追求。化学療法では最新の知見に基づく標準的治療を実施し、手術・放射線治療・化学療法を適切に組み合わせた集学的治療を推進してきた。また、令和2年、がんゲノム医療連携病院に指定され、遺伝子変異に基づく新しい医療を推進。患者の遺伝情報を調べるがん遺伝子パネル検査を積極的に行い、治療方針の決定に役立てていくとしている(詳しくはP.1参照)。さらに今春、待望の緩和ケア病棟がオープン。これによって、がん診療に必要な機能が全部そろい、同院のがんセンターが本格的に動き出したのである。

がんセンターを率いる村田 透センター長(医局長、乳腺外科統括部長)に話を聞いた。「診断、手術、化学療法、放射線治療の各領域の機能、そして、緩和ケアや患者相談センターなどのサポート体制まで、ひと通りの機能がそろう、がん診療の質を総合的に高めていく基盤が整いました。その枠

CHAPTER 02 患者の価値観を尊重し、 人生に伴走していく。

オーダーメイドの治療を推進する一方、村田ががん診療のキーポイントとして重視するのが、緩和ケアだ。「高度医療の追求はもちろん大事です。でも、実は患者さんの身体的な痛み、精神的な苦しみを和らげることも、がん診療の基盤であり、がん診療の質の向上に繋がると考えています。その意味で、愛知県がんセンター愛知病院で培ってきた専門的な緩和ケアのノウハウを統合し、20床の緩和ケア病棟を用意できたことは、非常に大きな前進だと考えています」と村田は話す。

村田が緩和ケアを中心とする患者支援を重視するのは、自身が乳腺外科医として、常に患者の生き方を第一に考えてきたからだ。「患者さんは誰でも手術を受けたいかという、必ずしもそうではありません。標準治療を拒んだとしても、決して本人を責めてはいけません。治療は手段であ

組みにいよいよ私たちの精神といえますか、理念を吹き込んでいくという段階です」。では、同院のがんセンターは、どんな診療をめざしているのか。「診断・治療領域では、患者さん個々に合わせたオーダーメイドの治療に力を注いでいく考えです。とくに、がんの組織を顕微鏡で精査する病理診断を重視し、がんの種類や特徴を見極めた上で最も効果の高い治療プログラムを提案していきます。また、がんゲノム医療により、治療の選択肢がもっと広がっていくだろうと期待しています。こうした高度医療を積極的に展開することにより、〈がん診療連携拠点病院〉としての当院の役割、すなわち、地域のがん診療の連携の要となり、がん医療の水準を引き上げていく役割をしっかりと果たしていきたい」と村田は意気込みを語る。

COLUMN

●岡崎市民病院は令和2年9月より、市立愛知病院の緩和ケア病棟を引き継ぎ、13床の緩和ケア病棟を運営してきた。今春、新たに7病床を増やし、8階南病棟に20床の緩和ケア病棟を整備した。

●緩和ケア病棟では緩和ケア内科の医師3名を中心に、多職種が一致団結。苦痛な症状を和らげるための入院、在宅療養の準備をするための入院、家族の介護疲れを防ぐための入院など、さまざまなニーズに応え、患者と家族を支援している。

り、生きることが目的なんです。患者さんがどんなふうに生きたいか、という一人ひとりの意思や価値観を尊重し、そこに向かって最善の医療を提供することが私たちの役割だと信じています。また、残念なことにながなが再発して、治療法がなくなった場合も、患者さんが納得して自分の一生を終えられるように支えていく。最初の診断から終末期まで、ずっと支えるがんセンターに育てていきたいですね」と話す。

がんという病気は、治っても再発のリスクがあるし、治らないがんと一緒に生きていかねばならないこともある。同院は市民の生活に最も身近な病院として、一人ひとりの人生に密着したアプローチをめざす。「生き方に寄り添うがん診療」という考え方を、私たちががんセンターの背骨におきたいと考えています。そして、スタッフ全員がその思いを共有し、高度な医療と手厚いケアを融合させながら、がん患者さんが望む生き方を叶えていきたいと思えます」と村田は決意を新たに、こう締めくくった。

BACKSTAGE

がん患者の思いや生活を 支える重要性。

●高度急性期病院の入院期間短縮化の流れに伴い、がん患者も治療後は速やかに退院を迫られる。しかし、退院後、外来で放射線治療や化学療法を続けるケースも多く、治療に対する不安、副作用の苦しみ、経済的困窮などの悩みは続く。

●患者の苦しみや悩みを、一緒に乗り越えていこうとするのが、岡崎市民病院・がんセンターのスタンスである。今後どのようなアプローチを展開していくのか、その行方に注目していきたいと思う。



岡崎のTeam

チーム医療を知ろう

今回のテーマ

乳腺外科チーム

乳がん患者さんの苦痛や不安に寄り添い、検査から生活復帰まで、多面的にサポートします。

専門性を持つ多職種が連携し、身体・精神・社会的側面から、乳がん患者さんを支えています。

乳腺外科チームは、乳がんを中心とした乳腺疾患の患者さんを支援するチームです。

乳がん患者さんの多くは、がんの診断・治療に伴う痛みや不安に加え、診察・検査時の恥ずかしさ、乳房切除による喪失感や脱毛などにより、精神的苦痛を抱えます。また、乳がんは働き盛り・子育て世代に発症しやすいがんであるため、妻や母としての役割と治療の両立に、不安やストレスを感じる患者さんも少なくありません。

そうした乳がん患者さんを身体的、精神的、社会的側面からきめ細かくサポートするため、当院の乳腺外科チームには、医師、看護師、診療放射線技師、臨床検査技師、遺伝カウンセラーなどの多職種が所属。それぞれが専門性を活かしながら、密に連携して活動しています。



Staff's message



乳腺外科チーム
乳がん看護認定看護師
榎原佳子

自分のことを後回しにせず、早期発見を心がけましょう。

家事や育児、介護など、一定の役割を担うようになると、その役割を果たすことに一生懸命で、自分のことは後回しになりがちです。これは乳がんに対しても同じで、多少しこりを感じたとしても「今は育児が大変」とか「仕事や家事、介護に穴をあけられない」などの理由で、受診を先延ばしにする方がいらっしゃいます。

乳がんは進行する前に発見すればかなり

の確率で完治をめざせるため、早期受診・早期発見が何より大切です。家事や育児、介護とがん治療の両立に不安を感じる方も多くありますが、もし乳がんと診断されても、私たちチームがさまざまな角度から皆さんを支えます。普段からセルフチェックを心がけ、しこりなど気になる点があれば、ぜひ早めに当院を受診してください。

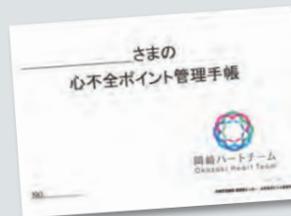


プラスα ▶夏バテ予防② 水やお茶でこまめに水分補給。起床時や入浴後、スポーツをする時は特に気をつけましょう。

HOSPITAL NEWS

心不全連携パスの運用を開始。かかりつけ医とともに心不全患者さんを支えます。

当院では、心不全患者さんの再入院を予防する取り組みとして、令和3年6月から「心不全連携パス」の運用を始めました。この連携パスは日常診療を担うかかりつけ医と専門医療を担う当院の間で用いる共通の診療計画書のこと。機能の異なる医療機関が治療経過を共有し、一貫した診療を行うことで、心不全患者さんを支えます。



当院の心不全連携パスでは、診療計画書とともに「心不全ポイント管理手帳」というツールを用います。これは自覚症状と体重の変化をもとに病状を点数化するので、点数ごとに当院を受診する必要性や緊急度が定められています。誰でも専門医療を受けるべきタイミングがはっきりわかるため、受診遅れによる病状悪化のリスクを減らすことが可能です。

臨床検査に関する国際規格ISO15189を取得しました。

令和3年6月、当院の臨床検査室がISO15189を取得しました。ISO15189は臨床検査室の品質と能力に関する国際規格で、国内では日本適合性認定協会が評価・認定を行っています。

血液検査や心電図をはじめ、現代の医療において臨床検査は診断や治療を左右する重要な検査です。今回、ISO15189に認定されたことで、当院の臨床検査室の検査結果は国際的にも通用するデータとして認められることになりました。これは診療を行う医師はもちろん、当院を受診する患者さんの安心感にも繋がるのではないかと思います。当院の臨床検査室では、今後もスタッフ一丸となって、正確で迅速な検査に努めて参ります。



もの忘れ外来が拡大されました。

令和3年6月14日から「もの忘れ外来」の外来枠が増えました。新しい枠は月、火、木、金(第1金曜を除く)の午後2時からです。対象は紹介患者さんのみです。受診希望の方は、かかりつけ医にご相談ください。



病院広報誌 特設サイト



こちらから



地域の皆さんや連携機関の皆さんと「岡崎市民病院」を情報で繋ぐ、広報誌連動型コミュニケーションサイト。ぜひご覧ください。



LINE〈公式〉アカウント

病院広報誌「つながる」のLINE〈公式〉アカウントを開設しました。QRコードから「友だち追加」をお願いいたします。



岡崎市民病院

OKAZAKI CITY HOSPITAL

〒444-8553 岡崎市高隆寺町字五所合3番地1
TEL 0564-21-8111 <https://www.okazakihospital.jp/>



2021 No.06 7月号

発行責任者/院長 早川文雄 発行/岡崎市民病院 広報戦略チーム
記事提供/中日新聞広告局 編集協力/プロジェクトリンク事務局 発行/2021年7月